



胴上げされる女性の中には恥ずかしがる人も多いが、男性たちは構わず「ワッショイ ワッショイ」



「玉せせり」では、薬玉を奪おうと男たちもみ合いに。勝負の中にも笑顔があり、楽しいひととき。



新婚女性による羽つき。5回以上続けば、幸せになるといわれている。

一年に一度、

長崎の祭り

まちは笑顔であふれる。

―― 月の寒空の下、ふんどし姿の男たちが若い女性を見つけては、担いでいる大草履に乗せ「ワッショイ！ワッショイ！」と何度も胴上げをする。

この度肝を抜かれる光景は、「ヘトマト」という五島市下崎山地区に古くから伝わる民俗行事。しかしながら祭りの由来も名称の語源も、ほとんど分からない。代々、祭りの世話役である「御幣持ち」を務める山内家の八代目・山内清一さんは「日露戦争の頃には既にあった、それしか分かりません」と話す。

祭りは白浜神社での奉納相撲に始まり、二人の新婚女性による羽つき、長い柄の付いた薬玉を男たちが奪い合う「玉せせり」、青年団と消防団に分かれて豊作と大漁を占う「綱引き」と続き、最後に大草履がまちを練り歩く。山内さんは大草履の由来を「この地区は昔から牛の繁殖が盛んで、田畑を耕すのにも牛を飼っていました。大草履は一年中働いてくれた牛をねぎらうた

受け継ぎながら、新しい風を入れることとて、この祭りを存続していきたいと考えています」と御幣持ちとしての決意を語った。数年前から、祭りには地元の中学生在が全員参加し、男子は青年団に交じって大草履を担いでいる。「ワッショイ！ワッショイ！」まちに響きわたる声は、真冬の寒さを吹き飛ばすほどに明るい。

祭りの準備は二カ月ほど前から始まる。大草履の準備をするのは、地元の青年団のメンバーたちだ。大草履には設計図がない。約三メートル、重さ約三百キロもの大草履の作り方は、全て口伝で継承されてきた。彼らは山から切り出してきた竹を組み、藁で編んでいく。藁は桶を手刈りで天日干ししている農家から分けてもらったものだ。藁を編むのは、簡単な作業ではない。二、三人が協力しながら、バランス良く、そして美しく編まなければならない。

青年団のメンバーも若い頃は祭りを楽しみにしていたという。でも、へぐらを塗られるのだけは、やっぱり怖かった。団長を務める出口貴与さんは、都会から五島へUターンした二十一歳で青年団に入ったという。「小さい頃に見ていた祭りが、こんなに大変な準備が必要だということに初めて知りました。今は自分たちが祭りを支えてい

めに履かせるものではないか、と考えられています。大草履には小さな子牛用とも。いつからかこの大草履に乗った女性は良縁や子宝に恵まれるといわれているんですよ」と教えてくれた。

ふんどし姿の男たちは、自身も真っ黒になりながら、見物客に「へぐら」と呼ばれるすそを塗り付けてゆく。へぐらを塗られた人は無病息災で過ごせるといわれる。逃げれば逃げるほど、男たちは必死に追い回し、その姿はどこか微笑ましい。

ヘトマトは地元の人にとって、年に一度の大きな楽しみ。へぐらを塗られては笑い、大草履の上で舞う女性たちを見ては笑う。そこには和やかで温かな雰囲気があり、まち全体が一つになっているのを感じる。山内さんは「私たちは、この祭りをずっと続けていきたいと思っています。しかし島の小さなまちですから、後継者の問題からは逃げられません。私たちは伝統を

る、という自負がありますね」。彼らは祭りまでの期間、ほぼ毎日、仕事が終わると作業場に駆け付け、大草履を作る。時には相談しながら、時には冗談を言い合いながら、ひたすら手を動かす。彼らの心にあるのは、地元のために自分たちの手で祭りを継承していきたいという思いだ。地域の絆は、こうして培われていく。

祭りの日、彼らは相撲を取り、薬玉を奪い合い、綱引きをし、大草履を担ぐ。ヘトマトは若者たちが故郷のために汗を流す祭りであった。



大草履を作る青年団のメンバー。皆、情熱を持った好青年!

山内さんの祖父が書き残した祭りの流れや準備に関する覚え書き。

御幣持ちを務める山内清一さん。

